

以下は、平成25年 日本獣医師会 からの通達の抜粋（2）です。

<http://nichiju.lin.gr.jp/report/bukai/h25-ryouhousyoku.pdf>

飼育者に対する説明を行う際の留意点を Q&A 形式にまとめました。

Q1: 療法食と一般のフードは何か違うのですか？

A1: 療法食は特定の疾病または健康状態の犬猫の栄養管理のため、栄養成分の量や比率が調整された特別な栄養特性や特別な製造方法等により、一般的な健康維持食とは異なる特別な製品特性を有するペットフードです。

Q2: 療法食は、今まで食べさせていたフードと同じように与えれば良いのですか？

A2: 療法食の有用性が期待とおり発揮されるには、必ず獣医師の診療と指導を受けてください。

Q3: 獣医師の診療と指導を受けずに療法食を与えると、どのような問題がありますか？

A3: 獣医師による診療と指導を受けずに、不適切な食事療法が行われた場合、犬猫の健康被害を招く恐れがあります。

Q4: おやつは続けても良いですか？

A4: 療法食以外の食事を与えると、食事療法の有用性が期待とおりに発揮されない場合があるため、一般のおやつは与えないでください。使用する療法食と同じ栄養特性のおやつタイプの療法食であれば与えることができます。

Q5: 療法食の切り替えは、どのようにすれば良いのですか？

A5: 今までのフードに新しいフードを徐々に混ぜていき、その分、今までのフードを徐々に減らして行き、1週間程度で切り替えます。

Q6: 療法食への切り替えかうまく行かないときは、どうしたら良いですか？

A6: 次のようなことを試してみてください。

- 体温ぐらいに温める。これにより香りが出て食欲が増進します。
- 犬(または猫)の好物を少し混ぜてみて、香りつけをする。ただし病気によっては使用できないものもあるので、獣医師に事前に相談してください。
- 犬や猫が安心して食べられるよう、手から与えてみる。犬ではドライフードを水でふやかすと、柔らかく食べやすくなります。

- 食事の時に犬(または猫)の嫌いなことをしないようにする。例えば薬を混ぜるなど、犬(または猫)が嫌いなことが食事と関連して記憶されないようにしましょう。
- 食事の前に散歩させるなど、運動により食欲を刺激する。
- 猫では、食事を拒絶し肝リピドーシスとなるリスクを低減するため、切り替え時に、今までのフードと新しいフードを別々の皿に盛りつけ、いずれかの食事が必ずとれるよう準備しておく方法もあります。

Q7: 療法食を急に食べなくなったら、どうしたら良いですか?

A7: 体調やその時の環境などによってなかなか食べないことがあります。1日以上まったく食べない場合や、食事を十分に食べない日が3日以上続く場合には、早めに獣医師に相談しましょう。

Q8: 療法食がなくなったら、来院して追加のフードを購入すれば良いですか(犬猫を連れずに来院)?

A8: 定期的に来院し、診療を受けてください。疾病の進行や健康状態の変化に合わせ、食事療法(療法食の種類や給与方法)の見直しが必要となる場合があります。

Q9: 犬(または猫)の体調が良くなったのですが、このまま療法食を食べさせて良いですか?

A9: 食事療法を続けるかどうか判断するには、獣医師の診療を受けてください。適切なフードの選択は獣医師が行います。疾病の進行や健康状態の変化に合わせ、食事療法(療法食の種類や給与方法)の見直しが必要となる場合があります。

Q10: 病気の治療のためには、すぐに療法食を食べさせなければなりませんか?

A10: 症状にもよります。もし重篤な状態であれば、まずは、その改善を優先します。その後、状態が安定して食事管理ができるようになってから、療法食を与えはじめます。

Q11: 膀胱や尿道に尿石が溜まっている場合、すぐに食事療法をはじめの必要がありますか?

A11: まずは膀胱に溜まった尿石や尿道栓子による症状を改善するためには、外科的に除去するなど、適切な処置が必要となります。その後、尿石の管理や再発防止を目的に食事療法を開始します。

Q12: 尿石用フードは、ずっと同じものを与え続けて大丈夫ですか？

A12: できやすい尿石は犬猫の年齢、代謝、環境の変化により変わる場合があります。なお尿石の種類によって、異なる食事療法が選択される場合もあるため、同じ療法食を長期間与え続けることで、犬猫の健康被害を招く恐れもあります。そのため必ず獣医師による診療と指導を定期的に受けるようにしてください。

Q13: 肥満または体重管理用の療法食を与えることで、減量できますか？

A13: 減量を進めるには、まずは適切な減量計画の作成と定期的な健康診断が重要です。急激な減量は健康への悪影響が懸念されます。最初の1ヶ月は週1回程度の間隔で、その後、減量ペースが安定しても月1回程度の間隔で栄養評価（BCS、筋肉量、皮膚・被毛の状態）を実施し、その結果をもとに食事療法（食事量や療法食の種類）の見直しを行うことが必要です。

Q14: 皮膚疾患や食物アレルギー用の場合、どのくらいの間隔で食事療法（療法食の種類や給与方法）の見直しを行いますか？

A14: 皮膚の新陳代謝には3週間以上かかります。従って皮膚の炎症性疾患では、食事療法をはじめてもすぐには変化が見られない場合があります。一方、アレルギーによる炎症反応では、比較的早く反応する場合があります。このような疾患では、獣医師の指定した間隔で受診し、症状の変化にあわせて薬の種類や投薬量の見直しが行われることが一般的です。このときに、あわせて食事療法の見直しも行います。

Q15: 慢性の腎臓病の場合、療法食をずっと与え続けなければならないのでしょうか？

A15: 一度失われた腎臓の機能を回復することは難しく、病気の進行を遅らせることでQOLの維持管理に努めます。そのため定期的な生化学検査で病気の進行を確認し、それにあわせて食事療法（療法食の種類や給与方法）の見直しが必要となる場合があります。また高齢期の場合、腎臓以外の疾患の進行にも注意が必要です。そのため定期的に健康診断を受け、その結果、優先すべき食事療法の対象が変更となる場合があります。